

### 1. はじめに

東日本大震災を契機に、防災の観点から歴史地震研究の果たす役割の重要性が各方面から改めて指摘されている。その眼目は、地域に伝承されている地震被害の様相を地域の風景の中で再現し、地域の人々の納得感のある地震像を提示することにより、地域の人々が自ら防災を考える契機とするところにあると言えよう。

一方、これまでの歴史地震研究成果の蓄積により、近世の歴史地震被害については、地域に残る文書・伝承から、ある程度被害の実相を再現できるようになってきた。歴史地震研究を防災に更に生かすためには、精度の問題はあるが、近い時代だけではなく歴史を遡ってそれぞれの時代における地震被害や復旧過程の「相場感」を示すことが重要であるように思われる。

本稿では、西伊豆戸田において中世後期まで遡ることが出来る社寺の記録から、地域の津波被害について考察を試みる。

### 2. 御浜崎と諸口神社

西伊豆駿河湾に面する戸田港は、砂嘴に護られた天然の良港である。この港を形成する砂嘴は御浜崎と呼ばれ、岬の先端には、延喜式神名帳にもその名が見られる、諸口神社がある。砂嘴の地盤面は標高2m程度であるが、現在の諸口神社は土盛した上にあり標高4~5m程度であると推定される。

諸口神社由緒によれば、「創建年月不詳、応永8年(1401)3月再建。明治12年8月村社に列す。現在殿は昭和28年4月改築。」とある。また、社宝「応永8年三月吉日棟札」と応永8年銘の「鰐口」が現存している<sup>(1)</sup>。鰐口銘文には「武蔵国吉見郡久米田郷施主敬白、諸口大明神、応永8年辛巳霜月十五日」と刻まれている。「大日本金石史」にも所載されており、県下では7番目に古い金鼓(鰐口)である<sup>(2)</sup>。

諸口神社は式内古社として古来より崇敬を集めるとともに、「大弁才天女神元和9年亥八月吉日」の棟札に見られるように御浜弁天としても親しまれている<sup>(1)</sup>。

諸口神社の歴史と立地条件から、地震性の大津波に襲われた場合に大きな影響があると考え、地域の史料を調査した。

### 3. 宝泉寺に伝わる「御濱辨天略記」

宝泉寺(標高3.8m)は、安政東海津波とその後の暴風でディアナ号を失ったロシア外交使節団プチャーチン提督が代船ヘダ号を戸田で建造中に滞在した寺である。

17世紀初め頃一翁和尚の時に現在地入浜に移転したと伝えられる。一翁和尚は、山号を林光山・寺号を宝泉に改称して中興開山となった人で、寛永2年

(1625)7月26日示寂、「六十七年 成地呼天 末語一句 滅瞎駒辺」の遺偈が現存する<sup>(1)</sup>。

宝泉寺には、この一翁和尚の書になる、御濱辨天に関する縁起が最近まで伝えられていたが、残念ながら現在は逸失している。しかしながらその写しが沼津市戸田造船郷土資料博物館に所蔵されている。

この写しによれば、御濱辨天略記には13世紀建長年間以来の弁天様の由緒が記載されているが、その最後に以下の記述が見られる。

『當山勸請地御濱辨天略記

・・・(略)・・・

元弘年間議遷詞御濱垂松之下無幾遭海嘯之變土地流散至見礁骨

爾後村民積年累月運搬土石栽樹成林再復旧地

天文八年亦建天妃宮

至今茲三月始開龕衆羣集無立錫之地

元和二年丙辰三月 林光山宝泉寺中興開山一翁誌』

### 4. 諸口神社・御濱辨天と中世後期以降の津波被害

以上を年表にまとめると表1が得られる。

表1 諸口神社・御濱辨天の歴史

暦	記事	出典
元弘年間 1331-34	御濱辨天「御濱垂松之下」へ遷座 (諸口神社鳥居近く)	御濱辨 天略記
「無幾」	「遭海嘯之變」	
正平 16(1361) 正平地震		
応永 8 1401	3月 諸口神社再建 11月15日 鰐口奉納	戸田村の社 寺、諸口神 社鰐口考
明応 7(1498) 明応地震		
天文 8 1539	御濱辨天再建	御濱辨 天略記

これらにより以下のことが考察される。

○「元弘年間議遷詞御濱垂松之下無幾遭海嘯之變」および、応永8年(1401)3月諸口神社再建より、戸田における14世紀後半の海嘯被害が考えられる。

○「爾後村民積年累月運搬土石栽樹成林再復旧地」より、地域の崇敬の篤さが偲ばれるとともに、時間をかけた土地造成による高上げと防潮林による災害対策が古くより採られていたことがわかる。

○「天文八年亦建天妃宮」と1498年明応地震被害との関連について更なる調査検討が必要である。

(1)「戸田村の社寺」昭和61年10月1日 戸田村教育委員会

(2)『諸口神社「鰐口」考』、堤富士子、伊豆の郷土研究 第11集、田方地区文化財保護審議委員連絡協議会、S61.3.31、pp.161-163